

出水方言における呼びかけの イントネーションについて

木 之 下 正 雄

Masao KINOSITA

文末の音調は終りの二音節が高低（降調）、低高（昇調）、高高（平調）があり、高音と低音との際立たせ方にも段々あるが、昇調と平調とは感情の誇張の程度によるもので感情の類別に應ずるものではないので、末尾を下げようとする降調と下げまいとする昇調・平調との二つの型に分けることができる。

出水方言では文の初めや中間ではアク（アクセントの略）が保たれるが、文末ではイント（イントネーションの略）の影響を受け、時には壊されたり、常に文末に来る語は固定したアクがあいまいだつたり、又イントの固定したものがアクになつたりする。そのような場合について考察するのが本稿の目的である。

出水地方でも、地域により世代により多少の違いはあるが、江内村を主として、なべるく古い言い方を記した。出水地方中部東部の農民たちに大体共通である。

I 「呼びかけ」はすべて降調である。

A 尻下がりの語

竹原、岡野、マッダ（町田）、イチロ（一郎）、タケオ、オヨシ（女名）、アネ（姉）など。これらにクン、サン、ドンなどの接辞の附いた語。またイチロジ（一郎小父）、タケン（タケオの略）、オヨシバチ（オヨシ小母）など。

B 尻上がりの語

山田、中野、マッダ（松田）、マサオ、ヒデヨシ、ヨシコ、アニョ（兄）など。これらに接辞の附いた語。またマサジ、ヒデン、ヨシバチなど。

呼びかけは本来のアクと関係なく、AもBもタケハラ、ヤマダ下の型になる。但し終りから二番目が入声、撥音、無声母音なら、その前の音節が上がる。マッダ、ハンゾ（半蔵）、ヨシコ。高音部を卓立させる程、力をこめた呼びかけになる。

大声で長く呼ぶ場合も同じで、最後の母音の終りの部分が下降する。オカノオー、マサジイー。但し入声、撥音、無声母音の場合はその直前の母音を長く発音する。ヨシユーフ（良行）、マッダサン、オヨーシ

病院や銀行など大勢の人々の中から呼び出す場合に、ハヤシサーン、ハヤシサーン〔ハヤシ〕（カッコ内は本来のアク）という発音をきくが、生え抜きの音調でなく、この人たちも談話では降調というのが普通である。呼び出しではこの人たちは尻下がりの語も タケハラサーン〔タケハラサ

ン〕と呼ぶのであつて、アクと無関係な呼びかけイントの型を固守する点は同じである。

いずれにせよ、呼びかけでは語本来のアクが壊されて呼びかけのイントがそれに代るのが原則である。

2 「命令」もすべて降調である。

A 尻下がりの語

行^ケ、行^ケ ねえ、置^ケ、買^エ など。

B 尻上がりの語

イ^ケエ (イケル、埋める)、イ^ケ ねえ、飼^エエ、カ^エ ねえ など。

尻下がりの語もごく稀に長く言うが、その場合は 行^ケエ、買^エエ とも、行^ケエ、買^エエ とも発音する。後者は押しつけるような命令である。

尻上がりの語は短くいうこともある。

ハヨ モド^レ。オト^テ ケ (虫などに——昨日来い)。事務的な無愛想な口ぶりである。ネエが附く場合に長く発音することは多い。やさしみのこもつた口ぶりになる。

マタ ケ^エ ねえ。(また来いね)

上例のように、ネそのほかの語が下に附く場合は短く尻上がりに発音する方が多い。

上のように、二音節以上の動詞の命令の音調は、原則として降調になる点は呼びかけに同じで、本来のアクを保っている点は異なる。命令は活用形によつて表わされるわけであるが、命令という表現の態度が同一のイントを求めるものと思われる。

一音節の語は次のようである。

寝^レ [ネル)、見^レエ [ミル)、出^レエ [デル) は、四段的に用いることが多いので、二音節語と同じである。

A セ^エ [為ル)、ネ^エ [寝ル) (稀に)

他の語が附く場合も長く発音する。

B ケ^エ [来ル)、ク^エエ [食ウ)、デ^エ [出ル) (稀に)

無愛想な言い方や他の語が附く場合は短く尻上がりにいうこともあるが、普通は尻下がりの語と同じく発音し、本来のアクを失つてしまう。ネが附けば尻上がりになり、ネが降調になる。

助動詞や助詞が附く命令表現の音調は次の通りである。

(ア) ヤン・ヤイ [アル。上接動詞のアクによる] (敬語助動詞。ラルより敬意が高い)

クイヤン、クイヤイ (下さい) [クレ)、ミヤン、ミヤイ (見なさい)。押しつける気持が更に強ければヤを上げる。クイヤン、ミヤイ。

反語的な言い方又は下文が附く場合は昇調になることが稀にある。

ソゲン シテ ミヤン、ドゲン コテ ナーカ。(そんなにしてごらん、どんなことになるか——とめようとして)

(イ) ヤン (見ヤンの略)

来テ ヤン, ヨカムノ クルッデ。(来てごらん, よい物をくれるから)

普通は降調, 下文が附く場合又は附く気持の場合, 及びせき立てるような気持の場合は昇調になることが多い。

(ウ) ヤンセ [上接動詞のアクセによる。] (なさいませ)

デヤンセ [出ル], ミヤンセ [見ル], シヤンセ [為ル]。

本来のアクセの通りにいうのが普通である。尻上がりの語を 来ヤンセエのように降調に言えば押しつけがましい口ぶりになる。

(エ) テノ 見テ ノ, シテ ノ (為) (ミテノ, シテノ という部落もある)。目下に対する勧誘的な命令で, 見ロ, シロほど直接的でなく, 見テ ネ, シテ ネ より命令感が強い。ノは降調にも昇調にも発音するが, 降調は押しつけるような口ぶりになる。出水方言には, 終助詞ノはこの他に, やや丁寧な質問 ヨカノー, ヨカンノー (良いですか), センノー (為ないですか), コンノー (来ないですか) があるが, 同一語という感じはない。

(オ) ンカ (ないか)

コンカ [来ル], センカ [為ル]

勧誘・命令の場合で, カは常に降調に発音される。コ・セは長く発音されることもある。詰問の場合は コン カ(ア), セン カ(ア) となる。質問の場合は普通 コンケー, センケー, コンカイ, センカイであるが, 時には カイ になる。勧誘の気持を強く含み, 強圧的でさえある。ハヨ セン カイ。

命令にも, 命令—勧誘—希望と段々あり (これは主に語の選択によつて表わされる), その表現態度にもいろいろあるが, その音調はヤンセ・テノの他は降調が基本である。終助詞ヨ・ネなどが尻上がりの語に附く場合は活用語の部分は昇調になるが, 終助詞が降調になり, 命令のイントが助詞の部分に移つたにすぎない。出水地方の人々には大阪方言の ハヨ 行き, ハヨ シ などの音調から命令を感じることはしつくりしない。ゴラン, オクレ など (生え抜きの出水方言にはないが) 降調になる。語本来のアクセ感が稀薄で命令のイントが強く影響する。しかし呼びかけと違って本来のアクセは保つのが基本である。イントの影響力の強弱もあろうが, 一音節語の場合にアクセが壊されるのを考えると, 最終母音を延ばすことによつてアクセとイントの共存ができるからだと思う。

3 「終助詞」はアクセがない。

咏嘆・質問の言い方もイントが強く表面に出るので, これらを表わす終助詞は固定したアクセはない。多く用いられる終助詞は, A 下位 (a) ナ・ネ, B 中位 (b) ヲ・ヨ, C 上位 (c) ハン・ワイ, (d) ガ・ド, (e) ヤ・カイ, D 特殊 (f) イである。

(a) (b) ナ・ネ・ヲ・ヨ 文節に附く。ナ・ヲはネ・ヨより敬意が強い。ナ・ネとヲ・ヨの違いは次のようである。

(1) 相手に ヨゴザンシタ ナア (ヲは使わない) とお祝いを述べると, 相手は ヨカ コッ ゴ

アンシタ ラオ (ナともいうがヲの方が生え抜き) と答える。(2) ナ・ネは独り言のようにヌキムン ヂヤ ネエ (暑いものだね) というが、ヲ・ヨは常に相手に向い合つていう場合である。(3) 単純な質問にヨカッタ ナ というが、ヲ・ヨは使わない。(4) ヲナ, ヨネと重ねることができる。オハンガ ヲ ナア……。ソイデ ヨ ネエ……。 (5) 若い人たちはヲを余り用いない。新古, 雅卑, 敬意の違いになりつつある。要するに, ヲ・ヨは叙述内容 (オハンガ など) を相手に念を押す気持, ナ・ネは叙述内容と関係なく, 直接に相手を動かそうとする気持である。

降調・昇調に発音することは四つとも同じである (ネの昇調は多くないが)。長音の降調はかんで含めるような或は相手の説を押さえつけるような, 例えば年上の人が年下の人に対する口ぶりになる。短音の降調は卒直な断定或は自説を押しつけるような口ぶりである。昇調はせつかちな或はノニというような反抗的な口ぶりになる。

オハンガ ソゲン ユタ ナ (あなたがそんなに言つたよ—確かに覚えています)

ユタ ナ (そんなに言つたのに—もう忘れたの?)

ダイガ ソゲン ユタ ナ (誰がそんなに言つたか—教えて下さい)

ユタ ナ。(誰がそんなに言つたか—怒つたような, 詰問するような態度で)

(c) **ハン** は〔オハン〕(あなた)の転用で相手の注意を喚び起すためのものである。文節の後に附くが命令には附かない。降調が普通である。

昇調は次のような場合文末に限つて用いられる。

ソンナラ ソゲン シュ ハン。(そんならそんなにしよう—不承不承にやや反抗的に)

オモゴト イカンムン ハン。(思うように行かなくてね—不思議だとか不愉快だとかの感情を主として)

ワイ はハンの敬意の無い言い方。〔ワイ〕(お前)の転だらうか。音調はハンに同じ。

(d) **ガ** 文末だけに用いる。命令及び疑問には附かない。判断について念を押す気持である。

ハヨ スー ガア は普通の勧誘, スー ガア は強力な勧誘。

子ドマ アスケ オー ガア。(子供はあすこにいる)はオルヨという断定。オーガアはキツトオルニキマツテイル というような, 推定に基づく断定である。

「コイデ ドゲン ヂヤロ カイ」「ンー, ソイデ ヨカ ガ」「(これでどんなだらうか)」「うん, それでよいよ」—きつぱりした断定である。客「十円 = 負ケヤン」, 店員 A が店員 B に「ソイデ ヨカ ガ」(それでいいよ—指示を与えて, 慰めるように)

ワイモ イツド ガ。(お前も行くだらう?) 相手の同意を期待して尋ねる場合である。昇調が普通で, 降調は同意を強要する口ぶりである。江戸時代の ソウデアロウガノ と同じ。

ド は(ゾともいう)ガより強く念を押す気持である。命令及び疑問以外の文末に用いる。降調は余り用いないが, 用いれば説得する態度の場合である。

ソケ アッタ ド (相手の言い分を押さえて, イイエ, ソコニアッタデスヨの意味)

(e) **ヤ・カイ** (ケー) は活用語や体言に附いて同輩以下への質問を表わす。降調が普通である。質

問の気持が強かつたり大声で長呼びしたりする場合は昇調になることが多い。(出水方言では、活用語の後には、質問のヤを余り用いない)

イコ ヤ (行こうよ), モドロ ヤ (戻ろうよ) などの勧誘は、昇調はせつち、降調は同意を押しつけるような口ぶりになる。

イコ カイ (行こうかね), モドロ カイで、昇調はしぶしぶ御興をあげる場合で自分に言い聞かせるような気持、降調は傍の人を誘う気持である。

質問には敬讓感や質問の態度などに応じていろんな言い方がある。

ナ ドイガ ヨカ ナ (質問。動詞の場合は連体形に)。ソイデ ヨカ ナ (咏嘆。時には軽い質問。動詞の場合は連体形をア段に変えて。行カ ナ)。ソイデ ヨカ ナア (質問)。草切イ ナ (質問は軽い。挨拶)。これを ナア とするのは、子供に対するいたわりのこもつた言い方になる。(a)のナの条で記したことと、感情と音調の関係が逆になるようであるが、あれはかんで含めるような言い方、これは感情をこめた言い方である。

コ (目上に対して)。カイと同じ音調。

ノ (前記) 降調だけ。

ヨ (同輩以下に。質問にはヤよりヨを多く用いる)。すべて降調である。ヨカイヨー〔良カ〕, イタヨー〔行タ〕。

ドイガ ヨカイヨ, ワカラン (どれが良いやら分らない) このヨは上例のヨと同一語であるかどうか不明である。

疑問助詞省略。ドイガ ヨカッ。ナイガ オモシトカッ〔オモシトカ〕のように、ツ (の) はすべて降調になるが、純粹の体言の場合は、「ダイ? マサオ?」のようにアクセントを保っている。

(f) イ には二種類ある。

(ア) イカイ〔行ク〕, チャライ〔チャッ〕, ヨカイ〔ヨカ〕, 知ラナイ〔知ラン〕。丁寧の助動詞の場合はサアになる。ゴアンサア, チャンサア, ヨカンサア。強い断定や決意を表わす。イの前はしばしば長音になる。連体形にワイが融合したものと思われる。前の語と一まとまりのアクセント節を作るが、普通のアクセントと異なる点は、初めの語のアクセントにならないで、すべて降調になる点である。それで、一種類の音調しかないけれども、イントと見るべきである。

(イ) ノモイ〔飲モ〕, イヨイ〔行コ〕, ミロイ〔見ロ〕, シュイ〔シュウ〕。丁寧の助動詞の場合はソイになる。イキンソイ (行キマシヨウ), 見ンソイなど。意志形に附いて勧誘を表わす。勧誘のヤのぞんざいな表現であるが、ヤの崩れたものであるかどうかは不明である。ヤはイコ ヤ, ミロヤのように別のアクセント節を作り、また降調にも昇調にもなるが、イは前の語と同一のアクセント節を作り、そして本来のアクセントと無関係に常に降調である。

これらの終助詞はアクセントが固定していない。イントによつて降調にも昇調にもなる。ハン, ワイなどは、語源からは固有のアクセントが考えられるが、助詞化した時に固定のアクセントを失ってしまう。語として単独に取り出す場合、例えば「ヲ」ト「ナ」ノ使イ分ケワ というような場合は、短く発音する

場合は昇調であり、長い目に発音する場合は不定である（具体的な用い方に近く、降調が多い）。固定したアクセントがないのである。イなどは一種類の音調しか持たないのであるが、語に固定しているのではなくて、表現の態度に固定しているのであるから、アクセントと言うべきではない。

終助詞の音調は、降調はナ・ネが附く場合、特別の感情の曲節のない、平静な、或は話手の意見を押しつけるような場合で、昇調は急迫した、感情の曲節の強い場合である。

4 「感動詞」も降調である。

ナア・ネエ・オオ・ヨオは感動詞としても用いられる（オオは終助詞のヲと同じでないかも知れないが）。ナア・ネエは人に訴える場合、オオ・ヨオは応答の肯定である。名前を呼ばれた時はオイともいう。例えば「ヨシオ」と呼べば「オイ」と答える。「モウ スンダ カ」と聞けば「オオ」（オイとは言わない）と答える。いずれも降調である。

応答の打消はンーニャである。イイエに当たるのは昇調、イヤダに当たるのは降調である。

感動詞は打消のほかは、いくらかの不安定さはあるが、降調である。

ンダ（俺ドモワの転か）〔オレ〕

ンダモ（モは咏嘆）。ンダモシタン〔知ラン〕

マア ンダ マア。（昇調の場合も多い。下文がすぐ続く場合などである）

アツバア（さようなら。語として取りあげる時はアツバ。サヨウナラ、コンニチワなどの挨拶は本来のアクセントのまま。）

コラ（コレの転か）

ハラ・ハレ、ホラ・ホレ・ホイ（ソレの転か）ハラ・ホラということもある。ハラ イツカ ソダ
ンコッガ アッタテ、オメダサン ヨ（ほれ、いつかそんなことがあつたのに、思い出しませんか
—じれつたそうに言う場合）

ドレ、ドラ（ドレの転。ドオレ、ドオラのようにいうこともある。ドオレ、ドオラのようにいうこと
もある。最後の場合は、やつとこさ立ち上つて仕事に取りかかろうとする時の掛け声のようなもの
である。）

感動詞は殆ど一種類の音調だけなので、アクセントと言つてもよいように見える。しかしこの音調は語に固定しているのではなくて、表現の種類に固定しているのである。ただ感動詞は独立語なので、語即ち文（表現の完結様式を具えたもの）であるので、表現の態度のイントが語に固定しているように見えるのである。そのことは、ハラ・ホレ・ドオレなどが動揺していること、ドレが本来のアクセントを失っていることなどから考えられる。

5 「擬音語」「擬態語」も大体一定の型がある。

擬音語・擬態語は、上に記した表現の態度というようなものではないが、擬音語・擬態語の音調が一定であるのは、それらに共通の傾向のあるイントが語に固定してアクセントになつたのではないと思われる。

一定のアクの型をもつ擬音語・擬態語は、パント、パットのように、撥音・促音で終つてそれに副詞の機能を与えるトの附いた語である。これらは文節として降調になる。パント、パット、パンパン打ツ、ガタガタ 揺レル。しかるに擬音語・擬態語性が薄れると、アクが変る語がある。ガタガタニ、ヒヨロヒヨロニ。語の本来のアクは〔シズ〕シズシズ、シズシズト などのように、変ることがない。思うに擬音語・擬態語は感覚の直接的表出であつて、感覚の類別に依ずるイントがあり、それが固定してアクになつたものであろう。ウツカイのようなイ(リ)語尾の副詞のアクは昇調であるが(ドゥサイは例外)、これらも同様にイントの固定したアクと思われる。

以上、イントによつて、アクがこわされたり、固定したアクを持つていなかつたり、一種類のイントの場合はそれが固定してアクと識別しにくくなつたり、ある種の語のアクはこのようなイントの固定化から生じたかも知れないというような事などについて記した。そして、呼びかけ、命令、終助詞、感動詞は、直接的に相手を動かそうとする心理的基調において、共通なものがあり、従つてその音声的表現としてのイントに共通な点があるのだと思うのである。

昇調は急迫した表現態度を中心とし、降調はゆつくりした或は押しつけるような表現態度を中心とする。このような音調感はほぼ共通であるらしくて、英語でも

「上昇型が下降型よりも心理緊張の度合いが強く、往々相手の人間や情況に或種の抵抗を感じた inhibition のタイプであり、……下降型は inhibition より解放された率直、大胆なタイプで……」(音声学会々報 29 年 8 月、英語における要請、命令などの音調、安倍勇)

とあるのを興味深く思つた。

アクとイントに関して、大西雅雄氏は

元来、アクとイントとは峻別せらるべきものではあるが、互に入替り又は補足現象を起すべき場合も肯定しなければならぬ。イントの発展し定着したものがアクであると観るのは、神保格教授などの見解であるが、この点は我が国語にあつて特にその感が深い。同時に、未定着の間に往来してゐる語調子と言葉調子との間には、相互の交替乃至補足作用も当然承認されなければならぬわけである(日本語のアクセント所収、昭 17)

と述べていられるが、教育音声学(昭 24 年)には

「イントはアクと重複して行はれるが、之がためにアク単位が固有するアク型が打壊されることは絶対にはない。但し、厳密に言へば、語尾に低調を有する語が「昇調」のイントを重ねた時、又その逆の時は、母音の延長が行はれてその伸びた部分に昇調なり降調なりが加へられることがある」

と述べていられる。これは東京語についてであつて、後半は出水方言も同じであるが、前半は違ひがあることになる。(29 年 8 月)